



Title	「あらたし」から「あたらし」へ
Author(s)	阪倉, 篤義
Citation	語文. 1974, 32, p. 12-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「あらたし」から「あたらし」へ

阪 倉 篤 義

一

語形変化の一つの場合として、Metathesis（音位転換・転倒）の名でよばれる現象がある。語中において隣接、または他の音素を介して連続する、二つの音素（または音素連続）が、たがひにその位置をとりかへることで、幼児のことはをはじめとして、われわれ日常の不注意な発話においても、かなりしばしばあらはれるものである。しかし、その大方は、単なる言ひ誤りとして、その場かぎりで消えさって、方言集・俗語集の類にも記録されるにいたらないものが多いが、なかで、やや安定した地位をしめ得たものとして二、三の書物にあげられてゐる例を見ると、たとへばつぎのやうである。

チャガマ（茶釜）→チャマガ ツゴモリ（晦）→ツモゴリ
ルベ（釣瓶）→ツブレ カラダ（体）→カダラ アラブル（荒）
↓アバルル（暴） アラタシ（新）↓アタラシ タヤワメ（手
弱女）↓タワヤメ カカラフ（拘）↓カカハル（関）
（新村出「音韻変化の諸原因」『新村出全集』第一巻所収）
アラタシ↓アタラシ サンザクワ（山茶花）↓サザンクワ サ
ンボテ（イ）（仙人掌）↓サボテン アラブル↓アバルル タヨ

ワメ↓タワヤメ タマゴ（卵）↓タガモ トダナ（台棚）↓トナ
ダ チャガマ↓チャマガ ツルベ↓ツブレ カラダ↓カダ
ラ マナイタ（組板）↓ナマイタ ツゴモリ↓ツモゴリ ネ
コロブ（寝軀）↓ネコロブ トサカ（肉冠）↓トカサ マル
マゲ（丸鬚）↓マルガメ コマゴメ（駒込）↓コガモメ スゴモ
リ（巢籠）↓スモゴリ ボクリ（木履）↓コッブリ ヨモギ（蓬）↓
ヨゴミ オーイ（多い）↓オイ イラッシタ↓イラシッタ

アラタシ↓アタラシ ツゴモリ↓ツモゴリ ツグミ（糲）↓ツ
ムギ ヨモギ↓ヨゴミ チャガマ↓チャマガ タマゴ↓タ
ガモ カラダ↓カダラ （金田一京助増補『国語音韻論』）

（『国語学辞典』「音位転倒」の項）
見られるごとく、かなり特殊な例をもふくめて、前出の例をそのままに襲用したものが多く、まとめてみると挙例の総数はいくらかないが、さらにそのなかに、はたしてこれの例と認めうるかどうか、はなはだ疑はしいものがふくまれてゐる。たとへば、暴れ者のアバルをアラブの転倒とするのは、おそらくは無理である。これは、ロドリゲスの『日本大文典』に「アバレタヒト 生活や習慣のでたら

めな人」と説くやうに、「荒廃する」といふ意味で古くから用ゐられてゐる語で、アラブとは別語としなければならぬ。また、タワヤメのタワヤは、タワム・タワタワなど、しなやかなさまを表はす語基タワに接尾語ヤの接したものであつて、『万葉集』に「手弱女」の字をあててゐるのは、一種の語源俗解にすぎないと見るべきものである。カカハルも、カカフナルといふ構成をもつ語と見るべきで（拙稿「語義記述の現実と理想」『言語研究』五四号）、カカル十フの構成をもつカカラフとは、ともに「関係する」の意のカクといふ動詞から派生された点で関係をもつけれども、相互に音位転倒といふ関係で考へるべきものではない。また、イラッシタとイラシッタとの関係は、一見、促音音節とシとの転換のやうであるけれども、実はこれは、ともにイラッシャッタのくづれた形である。イラッシッタの形もありうるのであるが、促音の重複をさけて、いづれか一方を弱めたものが、この二つの形として現はれるのであつて、これを音位転倒とするのは、単に外見上の結果をいふにすぎないことになる。オーイ [oi] をオイー [oi:]、トイー [toi] をトイー [toi:] と発音するのを、長短の転倒といふのは、すでに事情が、以上のものとは、大いにことなつてゐる。これは、金田一博士自身例をあげてゐられるやうに、コイ（濃）をコイー、スイ（酸）をスイーなどと発音する方言における特殊な現象であつて、この場合、一律に○●○、あるいはむしろ○●といふアクセントの型にはめられることになり、末音節が長音化する傾向をしめすのである。これを転倒の結果とするのは、まったく、あたらない。

さらに、よし結果的には音位転倒になつてゐるとしても、その過程において意味が関与してゐると考へられるものも多い。ツブレに

ついては、柳田国男氏（『蝸牛考』）によれば、むしろこの方が原型にちかひのであるが、それがツルベといふ形をとるに至つたについては、そこに、「釣る瓶」といふ解釈が入りこんでゐるに相違ない。マナイターナマイタについては、「なまものを料理する板」の意味が、トサカトカサについては「笠」の意味が、また、ボクリコッポリについては、これを履いてあるときの音のイメージが、それぞれ作用してゐると思はれる。これらはいづれも、もとの語形に對して、あたらしく語源解釈をほどこして造語しなほしたものとするべきであつて、その点では、單純な音韻上の問題にはとどまらないと考へるべきである。いはゆる隠語として、意識的に音位転倒による造語をおこなつたネタ（種）、ナオン（女）、エンコ（公園）の類は多数にあるが、これもまた別箇に考へるべきものである。

このやうに見てくると、純粹な音位転倒の確実な例とすべきものは、前掲のもののうち、さらに、

チャマガ	ツモゴリ	スモゴリ	ツムギ	タガモ	ヨ
ゴミ	マルガメ	コガモメ	カドラ	トナダ	サザン

など、少数のものにかぎられてくる。ハラツヅミ（腹鼓）↓ハラヅツミの例をこれに加へることができるともいれないが、すでに新村博士が前掲の論文に注意されたごとく、これらには共通に濁音音節が関与し、特に、gとmの音素転換（gが、前進する場合も、後退する場合もある）がいちじるしいほか、dとr・n、zとnの転換が、それぞれわづかに認められるわけで、有声音g・d・zと、鼻音乃至流音との連続における、日本語の発音上の傾向として、この現象をとらへることができさうである。そしてまた、このやうな、

いはば自然な音位転倒形は、みぎに見るごとく、一種の訛語として、多くは本来の形と並存しつつ、地域的・位相的あるいは時間的に、かぎられた範囲内におこなはれるにとどまって、つひに共通語的な語彙の体系中に正当な位置をしめ得ない運命をになふものが大部分であつたと言へるだらう。なほ、サザンクワはその例外と言ふべきであらうが、これは漢語すなはち外来語であることに、別種の考慮をはらふべき点がある。外来語については、そもそも、その借用された当時の、本来の形——転倒以前の形——といふべきものが、はなはだ不安定である。たとへばサボテンは、もと、ポルトガル語の *sabão* と「手」との複合語であつたとする説によれば、サボンテにちかひ発音であつたらうが、現にサンボテまたはサンボテイの形がおこなはれてゐた。日本語とはことなる音素配列の傾向をもつ外来語を借用するにあつては、種々日本語化のための変形が加へられるのが一般で、したがつて、それぞれが同等に訛形なのである。そのなかに、たまたま音位転倒の關係にある両形が存しても、これは、以上に考へてきた諸例とは別に考へるべきであらう。

このやうに、一般に影のうすい存在である転倒形のなかで、アラタシ↓アラタシの場合は、まことにめづらしい例といふことになる。アラタシといふ音位転倒形が用ゐられたと同時に、それまでおこなはれてゐたアラタシの形は、『催馬楽』には見え、また、訓点語としては、たとへば『地藏十輪經元慶点』に用ゐられた例があるが、和文語彙からはふつつりと姿をけして、もっぱらこの新形のみが用ゐられることになり、以後これが「新」を意味する代表的形容詞として共通語に定着して、今日にいたつてゐる。その転換のあざやかさは、（もし然りとすれば）まことに音位転倒の適例とすべく、こ

の現象について説く人にして、少くもこれを例にしめざるはなし、といふ有様である。新村博士も、前掲論文で「アラタシ（新）がアラタの子音錯置なることに至ては、衆人の一致する所なるべし」と言はれてゐる。

しかしながら、問題はむしろ、両者の、あまりにも画然たる消長にあるのではないかと思はれる。アラタシが、もし單純な音位転倒によつてたまたま生じた形であるとするならば、とりわけ規範意識のたかひはずの和歌の用語において、平安時代に入るとともに、旧形アラタシが、暫時もこれと併存することもなく、一挙にこの新形にとつて代られたといふことが、何とも不可解なのである。（ちなみに、奈良時代の文献においては、アラタシが「新」の意味に用ゐられた例は、勿論、一つもない）。もつとも、この場合、平安時代の和歌（の用語）と、奈良時代以前のそれとを、はたして直接の連続として考へてよいかどうかには、問題があらう。その間の和歌の歴史の断絶によつて、両者は、一住別箇の語彙を形づくつてゐたと見るべきかもしれない。しかしながら、いまの場合、問題は、アラタシおよびアラタナリといふ、情態形容的な意味を表す語詞にかぎつてあつたやうで、アラタナリの形もまた、たとへば『源氏物語』では、白氏文集の「三五夜中新月色」の句にもついで光源氏が述べる、「こよひのあらたなる月の色には云々」といふ詞にただ一ヶ所用ゐられてゐるのみで、他には用例がない（築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』参照）。一方、これと語基をひとしくするアラタム、アラタマル等の動詞は、ひきつづき数多く用ゐられてをり、アラタといふ形そのものに問題があつたとは思へない。そしてまた、この *arata* といふ音素連続は、さきに見た音位転倒を

おこしやすい一般的条件（濁音が関与すること）には適合せず、考へられることは、tとrとの発音部位が近似してゐる点くらゐのものであらう。かたがた、アラタシ→アタラシを自然な音位転倒の結果と見ることは、なほ一抹の疑念をさしはさまざるを得ないのである。

しかも、問題はさらに、この転倒の結果生まれた（とされる）新形が、すでに奈良時代以来用ゐられそして平安時代以後もひきつづき盛んに用ゐられた「惜」の意味のアタラシといふ語と、同形に帰するものであったといふ点にある。もっとも、『名義抄』や『図書寮本日本書紀』などによれば、平安時代において、「惜」の意味のアタラシは●●●、「新」の意味のアタラシは○○○●といふアクセントをもつてゐたと考へられるから、これによる区別は可能であつたであらう。しかし、たとへば前掲の転倒例を見ても、既存の語と形が一致することになったものは、ツグミ→ツムギ（紬と）の一例をのぞいて見当らない。これは、たとへたまそそのやうな転倒形が生れても、同音衝突の危険をさけて、すぐに廃棄せられた結果であらうと想像される。しかるに、このアタラシの場合は、たとへば、

春雨の世にふりにたる心にもなほあたらしく。花をこそ思へ

（後撰、七四）

のやうな懸け言葉の技巧が可能なほどに文脈的にも区別しかねる一面のある両義が、同一の語形に托されるといふ不便な結果になつたのである。この危険を回避しようとするれば、方法は簡単で、アラタニ、アラタムとともに、「新」を意味するアラタシといふ語形を保存してさへおけばよかつたはずである。その方がアラタニ→アラタ

シ→アラタムといふ語彙の体系的構造を維持する上にも、より自然であつたであらう。にもかかはらず、惜しげもなくこれを捨てて、あへてアタラシといふ語形を「新」を意味する形容詞として採用するにいたつたについては、従来考へられてゐるごとき單純な音位転倒による新形の発生といふこと以上の、おそらくはさらに意図的なならぬ事情が、そこに存したと考へる余地がありさうに思はれる。

二

アタラあるいはアタラシといふ語については、すでに大野晋氏なども説かれてゐるが、（たとへば『日本古典文学大系、万葉集』巻二補注）要するに、「合致させる、適合させる」の意の動詞アツを語基として、

メヅ（賞）→メヅラーメヅラシ（珍）、アク（飽）→アカラシ（惡、『靈異記』訓釈）

に對比しうるやうな関係で、あるいは、その自動詞アタル（適合する、相当する）を語基として、

イタブル（基振）→イタブラシ（不安定）、ホコル（誇）→ホコラシ、スサム（荒）→スサマシ（冷）、カタム（奸）→カタマシ 等々

に對比しうるやうな関係で、派生されたものと推定される。これらは、いづれも、語基の動詞によつて表現されるやうな作用・動作がおこる（おこなはれる）べき状態にあり、またはさういふ属性をもつこと、を言ふ形容語をつくるのであつて、したがつてまた、特に心情に關して、

ネガフ（願）→ネガハシ、イタム（痛）→イタマシ、シタフ（慕）→シ

タハシ、ウタガフ(疑)―ウタガハシ、アツカフ(拔)―アツカハシ、
ユク(行)―ユカシ等々

のごとくに、「……するのが当然だと感じられる状態や属性をもつ」
「……したくなるさまである」といった意味を表はす。問題のアタ
ラおよびアタラシが形容的に用ゐられた場合にも、まづ、「対象が
そのものの本来のありかたにかなふ(アタル)だけの属性をもつ」こ
とを、客観的に表現するものであったはずである。

しかしながら、あるものが、そのものの本来のありかたになつて
現にあり、将来もあるならば、それはむしろ当然のことなのであつ
て、わざわざ言表するにはおよばない。アタラあるいはアタラシの
語を用ゐて、あるものが、「それに相応すべきだ」「相当するはずの
属性をもつ」と、特に言表して強調されるのは、そのものが、現実
には、その本質にふさはしい処遇をうけてゐない、あるいは、将来
においてその本質の価値が維持されえないといふ惧れを感じさせる
客観的情况が存在するといふ場合である。そこから、これらの話は、
そのものを主語にたてて、その客観的ありかたを言ふよりは、むしろ、
これをいはゆる対象語として、これに關してひきおこされる話
者の心情、すなはち、その本質の發揮や維持を不可能にする不当な
情況への非難と、これと対比的に強調される、そのもの自体への感
嘆あるいは愛惜の気持を表現するものになつたのである。

奈良時代の文献に見られる用例は、すべてこの意味に解しうるも
のであつて、

田の畔を離ち、溝を埋むるは、地を阿多良斯とこそ、我が那勢の
命かく為つらめ。

は、土地がその本来の用途にあてられてゐないことへの抗議の意味
(記、神代)

がこめられてをり、

阿陀羅斯(猪名部の工匠懸けし墨縄) しが無ければ誰か懸けむよ阿
陀羅墨縄 (雄略紀)

は、名手猪名部の工匠が、あるいはそのすぐれた技術が、不当にも
その真価を無視され消滅しようとすることへの抗議と、愛惜の気持
をいふのである。

……大君にかたく仕へ奉らむと 我が命長くもがと言ひし工匠は
や 阿陀羅工匠はや (雄略紀)

にしても、さきの歌とともに、本来は、亡くなった名匠を愛惜追憶
する歌語であつたかもしれないが、『書紀』の説話において、これ
が、「天皇ヲ悟ス」意味の歌とされてゐるのは、やはりアタラに、
そういう事態を生ぜしめた事情そのものの不当さを訴へる意味が、
つよく生きていたからである。

しかし、歌がそのやうな対話性をうしなふとき、アタラ(シ)は、
もはや訴へても効のない事実を、それとして認めたくへで、ひとり
その不当さをなげく意味に、かたむいて行く。さういふ事実とは、
すなはち、時間の経過にともなふ、ものの変化といふことであり、
特にその衰亡と消滅の事実である。そのやうな不可避の事実を将来
に予想するがゆゑに、アタラ(シ)は、そのものの本質の持つとも
よく發揮されてゐる盛りの今の状態をたたへる意味を表はすのであ
るが、しかし、実際は、むしろ、その消滅をいたむといふ、消極的
乃至は否定的な方向にその意味の重点がうつるにいたるのである。

『万葉集』などに「惜」の字をもつて表現されるゆゑである。

安多良思吉君が老ゆらく惜しむ

安多良之伎清きその名ぞ おぼろかに心思ひて むなことも親の
(万葉、三三四七)

名絶つな

惜山の荒れまく惜しも

(万葉、四四六五)
(万葉、三三三二)

惜身の盛りすら……節の間も惜しき命を露霜の過ぎましにけれ

(万葉、四二二一)

秋萩に恋尽さじと思へどもしゑや安多良志。またも会はめやも

(万葉、二二二〇)

八田の一本菅は 子持たず立ちか荒れなむ

阿多良菅原 言をこ

そ菅原と言はめ 阿多良清し女

(記、仁徳)

樹に伐りゆきつ 安多良船材を

(万葉、三九一)

玉くしげ明けまく惜しき情。夜を

(万葉、一六九三)

安多良盛りをすぐしてむとか

(万葉、四三二一)

このころのしぐれの雨に菊の花散りぞしぬべき

阿多良。その香を

(日本後紀、延暦十六年)

のやうに、アタラ、アタラシのいづれも、つねに、「老ゆ」「過ぐ」

「絶」「荒る」「伐る」「夜明く」のやうな衰滅を意味する語、ま

たは、「またも会はめや」のやうな不可能を予想する反語にともな

つて用ゐられてゐるところに、それは、はっきりとうかがはれる。

そして、アタラが、みぎの例のごとく複合語を構成すると同時に、

また、最後の二例のごとく陳述副詞的に用ゐられる(この用法は現

在にも生きてゐる)にいたるのも、この語の情意表現の面がつよく

なつた結果にはかならない。

要するにアタラ(シ)は、盛りの今を、つねに、その消滅にお

びえながら、一ふたたびかへらぬことを予想しながら、いとほし

み、「勿体ない」と感じてゐるのである。この「勿体なし」といふ

語が、まさにアタラシに相当する意味をよく表はしてゐる。ただし、

これは、その語源のいま一つあきらかではない語で、「ない」を「無

い」の意味にとるか、単に形容詞構成の接尾語ととるかで、「勿」を

「物」の省字と見るか、否定の意味と見るかもきめかねるものであ

り、一方では、お礼のことばとしての「めでたい」からきた「めっ

たい」などにもとづく宛字とする考へ方(柳田国男「毎日の言葉」

があったりもするものである。しかし、新村出博士が「勿体ない」

といふこと)『全集』第三卷所収)に説かれるやうに、「物体ナシ、

即ち物ノ正体ニ違フとか物ノ本体ヲ失スルとかいふ様に解」するの

が、結局は、あたつてゐるのではなくらうか。そのものの本体にた

がうて廢用に帰することを惜しみ(捨てるのは勿体ない)など、

また、わが分にすぎたこととして恐れ多く感じる気持を表はす(「そ

んなにしていただいては勿体ない」など)のであつて、その点で、

まさに以上に見てきたアタラシが、そのものの本質にたがふ現実や

将来の不当さをなげく気持に通じるのである。ただ、アタラシが、い

はば「正」の形をとつて、本来、否定をふくまず、否定的な意味は

文脈によつて生じるのに対して、「勿体なし」は、語形自体が「負」

の形をとり、否定をあらはにする。これは、この種の語の発想にお

いて、基本に存する否定的な意味が、表面化してくる結果であつて、

「物」に、その省体「勿」があてられるのも、「無し」といふ接尾

語が用ゐられるのも、そのやうな意識の現はれであらう。

平安時代以後においても、みぎに見たやうなアタラ(シ)の用法

は、そのままにおこなはれる。

「頭おろしすてで、まかりこもらなむとなむ思ひ給ふる」といふさ

まの、あたらしくきよらなる、ほど十五六ばかりと見えていみじ

うめでたきを……

(宇津保、俊蔭)

いと情なう埋れて、おはしますかな。あた。御かたちを。

(源氏、手習)

のやうに、直接にその状態を否定する意味の語が表現面にでてゐる場合は勿論のこと、

(a) 姫君(雲居雁)の御有様、さかりにととのひて、あた。うつくしげなり。

(源氏、梅枝)

(b) (玉鬘ハ)二十ばかりになり給ふまに生ひとのほりて、いとあた。しくめでたし。

(源氏、玉鬘)

(c) (宇治ノ中君ノ)あた。をかしきさまを明暮の見ものにて、いかで人々しうも見なし奉らむ。

(源氏、総角)

のやうに、表現のかぎりでは、「うつくし」「めでたし」「をかし」などの語とともに、若い女性の盛りの美しさをストレートに賞してゐるやうに見えるものでも、すべて、たとへば(a)については、雲居雁の入内が思ふままに進行しないといふ事実、(b)(c)についても、玉鬘や中君が草深い田舎に埋れてゐるといふ事実などを、それぞれの背景とし、さういふ文脈のなかで、「折角すぐれてゐるのに口惜しい」「勿体ない」といふ否定的ニュアンスをふくんで用ゐられるのである。

(少将ハ)人柄のあた。驚策に物し給ふ君なれば、我もく／＼と婿にとらまはしくする人の多かなるに、取られなむと口惜しくてなむ。

(源氏、東屋)

といふのは、常陸守が、わが娘の婿にと心ざす少将を、他人に横取りされるのが口惜しく感じるために、その少将のすぐれてゐることを「勿体なく」感じるのである。

このやうに、アタラシといふのは、あるものが理想的なるがゆゑ

に、その理想実現の困難な状況を考慮したとき、そのものを、いよいよいとほしく、貴重に感じる、といふのが本来であつた。非難は、背後の情況に対してむけられるのであつて、アタラシと叙述される属性をもつ主体にむかふのでは、本来なかつた。しかるに、平安時代における新しい用法として、理想にたがふもの、あるいは期待に反する事態そのことを、アタラと修飾し、あるいはアタラシと叙述することがはじまる。たとへば、

みづからは、手もいとあし、歌はた知らず、あた。事どもを。

(平中、一八)

こちといへばおほぞうなりし風にいかがつけては間はむあた。名立てに

(かげろふ日記)

御すき心のふりがたきぞあた。御疵なめる。

(源氏、朝顔)

故少弐のうまごは、かたはなむあなる。あた。ものを。

(源氏、王鬘)

など、いづれも、不本意なマイナスの事態そのものをアタラと形容してゐる。アタラシについても、

この源氏のかく沈み給ふこと、いとあた。しう、あるまじき事なれば……

(源氏、明石)

この君のかく見ならひ奉りて、今はとよそに思ひきこえむこそ、あた。しう口惜しけれ。

(源氏、総再)

さぶらふ人々も……まづはかきくらし、あた。しう悲しき御有様と見奉る。

(源氏、御法)

ただ人にては、あた。しう見せま憂き御さまと、(源氏、紅梅)

(玉鬘ヲ監ニ許スコトハ)たいだいしく、あた。しきことなり。

(源氏、玉鬘)

あとの三例のごときは、「悲し」「見せま憂し」「たいだいし」のやうな否定的な意味の形容詞とあはせ用ゐてゐて、さきの「めでたし」「をかし」「うつくし」などの形容詞とならべ用ゐられてゐるのと、まさに対照的である。

もっとも、これらが「残念だ」「不本意だ」といふ気持ちを表はすのは、本来はさうであつてはならない、理想の状態や属性を、たとへばその人物や事態に期待するからである。現実の事実(B)によつて、その人物や事態のイメージ(A)がきずつけられるといふ意味で、BはAにとつて「勿体ない」のである。その点、さきに見たアタラシといふ語による表現と、Aに対する認識においては一致するのであるが、ただそれを、かつては、「Bを考慮することによつていよいよAがアタラシ(勿体ない)」と表現したのに対して、いまや、「Aにとつて、Bがアタラシ(勿体ない)」といふ表現が生れるにいたつたのである。不当な否定的事実そのものを直接にアタラシと叙述するといふことは、いはば、アタラシが、逆に、アタラズ(本質に相応せず。不当である)といふ否定的意味を表はすにいたつたとも見えるのであつて、そこに、「勿体なし」にも見られるやうな、この種の語の意味の複雑な屈折をうかがふことができるやうである。

三

一方、「新」を意味したとされるアラタといふ語は、もと、生成するさまを言ったものと考へられる。そのアラは、恐らくは、出生・出現を意味するアル(「阿礼ましし神のこと」と)万葉(一九)といふ動詞であつて、アラハル(現)といふ動詞とも、その点で関係しあふ語であらう。そこから、この語には、

年月は安良多安良多にあひ見れど我が思ふ君は飽き足らはぬかも

(万葉、四二九九)

今更に寝めやもわが背子荒田夜の全夜も落ちず夢に見えこそ

(万葉、三二二〇)

のやうに、つぎからつぎへと出現して、交替・変転するといふ意味があつたのである。年や月や日は、さうしてつぎつぎに更新するもののもつとも代表的なものであつて、

阿良多麻の年が来経れば、阿良多麻の月は来経行く(記、景行)

阿良多麻の来経行く年を年久に……

(熱田大神宮縁起)

のやうに、年や月に対する枕詞として用ゐられるアラタマノといふ語も、このアラタに情態を意味する接尾語マが接して、くるくると交替するさまを言つたものである。その意味をもつて「来経」といふ語に呼応するのであり、さらには、「環のす戸が竹垣」(万葉、二五三〇)のやうに、直接「キヘ」にかかる枕詞ともなりえたのであつた。『万葉集』に、このアラタマを、みぎのごとく、しばしば「環」「荒玉」の字を以て表記してゐるのは、いはば宛字であつて、アクセントも多分ちがつてゐた。平安時代に、アラタマ(環)は●●●と、上をもつてはじまるアクセントをもつてゐて、そのアラは、●●●と、上をもつてはじまるアクセントはともに上をもつてはじまる)からの派生語であることをしめし、一方、アラタ(ム)は○○●(○)と、平をもつてはじまるアクセントをもつてゐて(ちなみにアラハス・アラハルもおなじ)、みぎとは語源をことにしたことが、金田一春彦・大野晋氏らの説かれる法則によつても考へられる。恐らくは、そこに、「環」といふ語のもつ、「新出の、新鮮なるもの」の意味と結びつけた語源解釈があつたのであらう。

アラタには、たしかに、「新生」の意味があった。したがって、たとへば、

……我が国は常世にならむ 凶負へる奇しき亀も 新代と泉の河に持ちこせる真木のつまでを…… (万葉、五〇)

のアラタ世には、無論、新都建設にあたつて、あらたまれる新生の御世をことほぐ気持がつよいけれども、同時にこのことには、我が黒髪^{アヲ}の真白髪に成りなむきはみ 新世に共にあらむと 玉緒の絶えじい妹と 結びてし…… (万葉、四八一)

のやうに、つぎつぎに改まりつつ連続して絶えないといふ気持、「常世にならむ」といふ確信が、その裏づけとしてあった。そのやうな改新のエネルギーの永続するさまをいふのが、アラタシといふ形容詞であつて、

阿良多之支年のはじめにかくしこそ千年をかねて楽しきをへめ

(琴歌譜)

のアラタシキ年といふのは、そのやうな永遠なるものの出発点としての新年であり、さればこそ、「千年をかねて楽しきを経め」と、千年にわたつて楽しきをつづけることが期待されたのである。

しかるに、時間の経過に関する認識の時代的な変化は、次第に、事態の永遠の連続に対する確信をうしなひ、将来はさておいて、ひたすらに、新生のよろこびをもつ現在をたたへる気持をつよくしてきた。それが、アラタシといふ語が、もっぱら *new* の意味にかたむき、「新」の文字をあてて表記されるにいたつた理由であつたと思はれる。

そして、このやうに現在を讃美する気持は、やがて、これを最高の状態として、将来におけるその消滅を惜しみなげく気持につらな

る。それはまさに、さきに見たアタラシといふ語の心情に、はなはだ近いものであつて、ここに両者の微妙なコンタミネーションのおこる事情があつた。みぎの歌が、『古今集』に大直比の歌としてをさめられてゐる場合のやうに、

あたらしき年のはじめにかくしこそ千年をかねて楽しきをつめ、の形にあらためられたときには、すでに、このやうな新年のよろこびが永続はし得ないであらうとする予感が潜在してをり、したがつて、下句もまた、「千歳をかねて楽しきを集め(千年分の楽しみを、今に集中せよ)」と変へられてゐるのである。このやうな変化をひきおこしたものは、いふまでもなく、古今的世界をささへてゐる、時間の推移を発展の相において見るよりは、むしろ衰退の相において見ようとする、時代の物の考へ方であつた。新しきものは、それがやがて古び衰へ、そして消滅して行くことを予感するがゆゑに、より勿体なく、新鮮だと感じられたのである。すなはち、それは、アラタシサ(新)を、むしろアタラシサ(惜)のニュアンスでとらへることであつた。はじめに掲げた「後撰集」七四の歌におけるやうな懸け言葉が意味をもつのも、そのためである。

しかし、勿論、両者の意味は、完全に一致するものではない。同音衝突の危険ををかつて、既存のアタラシを、すべてそのまま「新」の意味に適用することはできない。その錯雑した心情の生んだものが、音素配列においては「惜」の意の *awabaresa* と一致しながら、アクセントにおいてはアラタシと同じ〇〇〇●といふ型をそのままにたもつ、「アタラシ」といふ新語であつたと考へることができらるであらう。(逆に、「新タマ」を「環」で表記した前述の事実をも思いあはすべきである)。アクセントもまた語形の重要な一要素で

ある以上は、語意の変化に際して、アクセントがこれに関はりあふ場合のあつたことが、当然推定されてよいのである。そして、平安時代の和歌や和文の語彙には、はじめから、この新語形が「新」を意味するものとして、積極的に組み入れられるにいたつたのであった。

勿論、以上において、そもそもこの二つの語形が、単にラとタの二音の位置が入れかはるだけの相似をしめしてゐたことが、みぎの

やうな事情を生むについて、全く無関係ではなかつたことは否定すべくもない。しかしながら、これを単なる音位転換の結果としてきた従来の見方は、語形の変化といふ、語彙体系にとつての重大な事実を、あまりにも単純に考へすぎてゐたものであると言はざるをえないことになると思はれる。語は、そのやうに簡単に形を変へるものではないのである。

—一九七四、一、一三一

(京都大学教授)